

とち うみてるよし
第49代横綱 栃ノ海晃嘉

横綱だということは、それはそれは重いものです。本当に息苦しくなりますよ。毎日、朝から晩まで、空気を吸うことすら苦しくなってくるような感じです。

私が生まれたのは、青森県の弘前市に近い田舎館村というところでしてね。

田舎館というだけあって、本当に田舎ですよ。そこで、両親はリンゴ園をやっていたんです。

六歳の頃です、父親が亡くなったのは。小学校に上がるか上がらないかの時ですから、私は父親の記憶というのはほとんどないんですよ。「こんな感じの親父だったな……」という、姿かたちくらいかなあ。覚えがあるのは。

その後、母親も相次いで亡くなりました。ただ、兄弟が多かったし、特に姉には母親代わりになってもらって、私の面倒を見てくれました。だから、私は地元の高校にも進学することができたんです。

弘前商業高校（現・青森県立弘前実業高校）に進んで、私が三年生の夏休みのことです。

出羽海一門の力士たちが、巡業にやってきました。その一行には、私の小中学生の同級生、須藤良一君がいました。須藤君は後に幕内まで進んだ一ノ矢（後・一乃矢）という力士で、明治時代に活躍した

大関・一ノ矢関とは、遠縁に当たる人です。中学を卒業するとすぐに、須藤君は春日野部屋へ入門して
いました。

須藤君とは家も近所でしたし、中学を卒業して以来、久しぶりの再会になります。彼に会いに行くと
いう目的で、私は巡業に行き、土俵の近くの溜まり席で朝稽古から見させてもらったんです。

もちろん、その時私には「力士になろう」などという気持ちはまったくありませんでした。でも、私
を巡業に連れて行ってくれた大人の人が、

「どうだ？ おまえもやってみないか？」

などと言ってくるし、同級生の須藤君が鬘を結って力士として地元で歓迎されている様子などを見て、
私の気持ちは次第に揺れてきました。

ちょうどあの頃、昭和三〇年当時っていうのは、就職難だったんですね。私が通っている高校は商業
高校で、進学校でもなかったし、高校を卒業して就職しても、今みたいに大きな会社も少なかったもの
ですから、卒業生のほとんどは個人のちっちゃなお店に就職して、帳面をつけるとかがせいぜいでした。

一学年が二〇〇人くらいの中で、地元の銀行へ入るなんていう生徒が、三、四人あったかなあ？ そ
ういう時だったんですよ。

そんな状況だったから、力士にでもなって東京へ行けば、力士がダメでも、またなんか仕事があるだ
ろう……って、当時はその程度の考えですよ。

一応、私は高校では相撲部に入っていました。でも、「活躍した」とかいうレベルじゃないんです。
でも、土俵の近くで力士の稽古を見て、特に幕内に入って、横綱、大関クラスになってきたら、迫力が
まったく持って違いましたね。

今でいう「カッコイイ」。そんな感じです。独特の雰囲気にはフラフラッと来た私は、その日の巡業が終わる頃には、力士になろうという気持ちに傾いていました。

余談になりますが、当時は巡業の形態も今とは違って、一門別に地方を回っていました。

一門というのは五つあります。でも、地方を巡業していたのは、六組ありました。初代・若乃花関がいた花籠部屋は二所ノ関一門ですが、花籠部屋だけが、一門とは別に単独で巡業して歩いていたんです。

全国津々浦々、それこそ大きな町からちっちゃな村まで、隅々まで入って巡業をしていたそうです。

当時は、一月、三月、五月、九月の四場所制です。だから、今より巡業をして歩ける日数が多いんですね。夏のあたりや、秋から冬にかけて、二カ月くらい続けて巡業することができたわけです。そういう時代だったんです。

話は戻ります。すっかり相撲に傾倒した私は、須藤君に頼んで、力士になりたいことを春日野部屋の人に伝えてもらいました。兄や姉は、もちろん反対。

「おまえみたいなちっちゃなヤツが、相撲に行ったら……」

と、てんで相手にしてもらえません。

それは当然のことでした。私の体重は七〇キロにも満たなかったんですから。身長は一七五センチくらいはありましたが、身内としては「そんな体で務まるわけないだろう」というものですね。

ですから私は、須藤君たちが回っている巡業に途中から同行させてもらい、夏休みが終わっても、田舎に帰ることはありませんでした。高校にも何も伝えていなかったのに、三〇年秋場所の新弟子検査に合格して、一番出世をしたことが新聞に出てしまったので、事後承諾といったところですね。

新弟子検査の時で、一七六センチで七十二、三キロです。どうしても体重が足りないものですから、検査の前に水をたくさん飲んで計測にのぞんだんですが、まだ足りない。検査会場の親方から、

「もうちょっとだけ足りないから、おまえ、もう一回水飲んでこい」

なんていわれて、また水道の蛇口のところへ行って、水をガブガブ。それで、ようやく合格です。

私が入門した春日野部屋は、当時五〇人強の力士がいました。今ほど部屋の数が多くないですから、一つの部屋の力士数も多くなる。それと就職難も重なっていたもんから、その分、お相撲さんになりたいたいという人も多かったんですね。

東京の部屋で稽古をし始めてからは、まるっきり自信をなくしてしまいました。まあ、自信なんていうものは最初からなかったんですけど、「俺でも少しいくらいは通用するんじゃないかな？」なんていう気持ちはあったわけですよ。でも、自分が思っていたレベルと全然違う。みんな、強いなのって。

「これはエライことになった」

プロの力士っていうのは、こんなにも力が違うのかなと、もうガックリです。

初土俵を踏んで、どういうわけか負け越しはあまりなかったんです。入門して六場所目で三段目で全勝して、翌場所幕下に上がって、幕下では一回負け越しを経験したんですが、昭和三三年名古屋場所で幕下優勝することができて。三四年初場所、新十両に上がった時が二十歳でした。

私が入門して一年後に入門してきたのが、後の大鵬の納谷でした。納谷は出世が早くて、すぐに幕下が上がってきた。その頃には、「二所ノ関部屋にすごい強いのが入ってきたぞ。納谷っていうんだ」という噂がバーッと広まってね。

私が本場所の時に納谷を見たら、たしかに背は高かったけど、そんなに太っていない。もうスラッシュとしている印象でしたね。納谷とは、私が幕下優勝した三三年名古屋場所で、幕下同士で初めて対戦しているんですが、その時は私が勝ったんですよ。それから五場所くらいは私がずっと勝っていたんですけど、彼が大鵬に四股名をあらためてますます強くなっていったからは、もう全然ダメですよ。出世の速度が違い過ぎて、あまり顔が合わなくなってしまうんです。

十両は七場所いて、三五年春場所、ようやく新入幕することができました。

その時でさえ、一七七センチで八十八キロですから、今じゃ考えられないくらいちっちゃいですよね。その年の秋場所、再入幕を機に、四股名を本名の花田から、栃ノ海にあらためました。師匠の元栃木山関、尊敬する部屋の先輩・栃錦関から、「栃」の一文字をいただいたの四股名です。

再入幕すると、技能賞を立て続けにいただくなどして、幕内の上位に番付を上げることができました。

憧れの横綱、大関戦も、そろそろ実現する地位まで来たわけです。

その頃のことです。当時の横綱・若乃花関から、コテンパンに痛めつけられたのは……。夏巡業中に土俵上で若乃花関に、「お～い、お～い」って、私が呼ばれるんです。若乃花関と私は、本名が「花田」

で一緒だったものですから、つかまったら最後、土俵上でひでえ目に遭わせるんですよ。これでもかっ
ていほど稽古をつけられて、「もう若乃花関とは土俵上で会いたくない」と思わせるほど、私にダメ
ージを負わせるわけです。

私は翌場所には、番付上、横綱大関との対戦が決まっていたから、若乃花関はわざと私を呼びつ
けて、恐怖心を植え付けるわけです。土俵に上がったら、まともに若乃花関の顔も見られないくらいの
恐ろしさでした。

でも、横綱というのは、あのくらい強くなくちゃいけないんですね。相撲だけじゃなくて、下の者に
横綱の威厳を見せ付けるということも大切なことなんです。

三六年秋場所、若乃花関と初めて対戦しました。もちろん、結果は私の負け。翌九州場所でも力が及
ばず、翌三七年初場所十日目の三度目の対戦で、私は若乃花関に勝つことができました。でも、残念な
ことに、これが若乃花関との最後の対戦となってしまいました。若乃花関は三七年夏場所限りで引退さ
れてしまったのです。

しかし、人生とは何が起こるか分からないものです。

若乃花関が引退したその場所、私は関脇の地位で十四勝一敗。初優勝してしまったのです。前の場所、
その前の場所の成績なども考慮されて、翌名古屋場所で大関に昇進。大関に上がった時でさえ、一〇二
キ口。こんな小兵な私が大関に昇進できたのです。

一方、同級生の須藤君も一ノ矢と改名し、私より一足早く三三年に十両に昇進し、三六年には入幕を果たしました。須藤君は私より体も大きく、素質がありました。だから、中学を卒業して五年で十両に昇進できたのです。

もし、私が須藤君のように中学を卒業してすぐに入門していたら、大関になれたかという、たぶん無理だったでしょう。体のできていない私が十五歳で入門したら、あちこちケガをして、大関どころか十両にも上がれなかったと思います。高校に入って、ある程度体の基礎ができてきて、相撲の経験も多少あったからこそ、順調な出世ができたのだと思っています。私は入門の時期というものも、相撲人生を左右することがあると思います。

大関では、左腰の打撲で休場するなどのピンチもありましたが、三八年秋場所で十一勝、翌九州場所で二度目の優勝と、横綱を狙える状況が整ってきました。

そして、翌三十九年初場所でも十三勝を挙げて、私は場所後に横綱に推挙されることとなりました。もうすぐ二十六歳になろうとしていました。

推挙されて、その後師匠（元横綱・栃錦）に呼ばれました。

「もう、後は引退だけだよ。ダメなら、すぐ辞めなきゃいけないんだよ」

まるで、引導を渡されたように、そう言われたのです。

これまで、大関までだったら、成績が悪くても、番付が下がればそれで済む。でも、横綱は引退しかない。だから、今までぐらいの稽古じゃダメだよ。

師匠の言葉は、重く私にのしかかりました。

横綱に昇進して二場所目の三十九年夏場所、私は三度目の優勝をすることができました。

私が昇進する時に、「こんな小兵で大丈夫なのか」という声があったと聞いていただけに、この優勝でなんとか横綱としての責任が果たせたという思いでした。でも、その年の九州場所、椎間板ヘルニアが悪化して途中休場。それからは、苦しい土俵が続きました。

横綱だということは、それはそれは重いものです。本当に息苦しくなりますよ。毎日、朝から晩まで、空気を吸うことすら苦しくなってくるような感じです。

四〇年春場所には、同じ年齢の佐田の山も横綱に上がって、大鵬、柏戸、佐田の山、私の四横綱時代に突入しました。

横綱は、每場所優勝しなくちゃいけない立場です。優勝が二人できるとか、三人でもいいというのなら話は別ですが、横綱が四人いる中で優勝は一人だけ。それでも、每場所「優勝」を背負って出場しなければならない。

その重圧から、私は寝付けなくなっていました。優勝三十二回の大横綱・大鵬さんなら話は違うのかもしれないけれど、私の場合、相撲に勝てば勝ったで眠れなくなってしまうんですね。明日の相撲のことだけ考えておきゃいいんだろうけど、「優勝」が頭にあり過ぎて、考え込んでしまう。中日が過ぎた頃には、千秋楽までの一週間、誰と対戦するのかということが、もうだいたいわかるわけですからね。

勝てば勝ったで当然。負ければ負けたでいろいろ言われて、そういうことも気になってきます。

だから、ずっとつらかったです。横綱になってから、ケガが多くなってきたというのもあるけど、ずっと、ずっともう……。太もも、腕、椎間板ヘルニア、足首、手首……。ありとあらゆるところです。でも、そんなことは、もういちいち理由にはなりません。

本場所が進んでいくにつれて、だんだん体重は減ってくるし、夜はアルコールでも飲まないで眠れない。私が一番体が大きかった時で、一〇七キロまで行ったかな？ でも、今と比べてあの頃はそんなに特別に大きな力士というのいなかったから、比較にはならないかもしれないけれど、あまりにも軽かったですね。

よく、現役当時、印象に残っている一番は何ですか？ と聞かれることがあります。でも、印象に残っているのは、ただ苦しいというだけで、「ああ、よかったなあ」と思ったのは、三回優勝した、その晩だけでした

横綱に推挙された二五歳の時、私はこう考えたんです。

「私はあまり大きくない。だからせめて、三〇歳までは現役を務めたい」

この体だから、長く横綱を務めようとかじゃなくて、思いっきり五年間やってみようという思いでした。

「心身練磨」という言葉が好きでした。身も心も練磨して、横綱を務める。そうなればいいなあと思う気持ちでした。でも、なかなか自分ではできなかったです。

先ほども触れたように、三十九年九州場所で、椎間板ヘルニアの悪化で途中休場して以降、私は満足な成績が残せなくなっていました。四十一年、二十八歳になってからは、休場が続いて、腕の手術の経

過も思わしくない。結果的に、「三〇歳まで」という目標を達成することができないまま、現役を退いたのです。

四十一年九州場所の七日目に引退を発表して、その後二日間くらいは眠り続けました。現役の時は、あれほど眠れなかったのね。ようやく「横綱」というものから解放されたからだったんでしょうね。

こんな私でも、横綱にまで昇進できたというのも、先輩であり師匠でもあった栃錦関のおかげだっと思います。

栃若時代を築いた栃錦関という人は、相撲に対して本当に真面目な人でした。冬、地方巡業に行くと、その頃は体育館などはほとんどありませんから、露天興行なもので、雪が降ったり北風が吹いたり、とても寒いものです。九州でも、あの頃はかなり寒かったものね。

そんな時は、関取衆たちは嫌がって、稽古土俵に降りてこないわけです。でも、巡業ですから、稽古の時からお客さんは入っている。お金を払って見に来てくれているお客さんに、失礼なことはできない。そういう気持ちから、どんな時でも栃錦関は土俵へ上がって、自分の部屋の関取衆をつかまえて稽古をするんです。

横綱の栃錦が土俵に上がれば、われわれ後輩が稽古タオルを持ったり、水を付けに行かなくちゃいけないわけなので、私たちもサボるわけにいかなくなります。そのくらい責任感が強い横綱でした。

振り返ってみれば、あの頃はきつかったなあと思うし、ちょっと稽古をサボったりすると、すぐ栃錦関にバレて怒られたりしたけれど、もし、若い時分にあのような教育を受けていなかったら、私なんか中途半端な力士で終始したんじゃないかと思うんです。

今、一人横綱の白鵬が連勝記録を塗り替えたり、一人で相撲協会を背負っている感もありますが、一人で横綱を張るのは、また四人いた私の時代と違ったつらさがあるんじゃないかと思います。

四人いるがために優勝のチャンスはなかなか巡ってこないかもしれませんが、逆に四人いるので、一人がちょっと体調が悪かったり、ケガをしても休むことができます。せっかく本場所に足を運んでくださっているお客さんに、横綱土俵入りを見ないでお帰りになってもらうというのは、やはり失礼です。

だから、できることなら、元気な横綱が二、三人おって、競い合うようになれば一番理想的ですよ。でも、そうは言っても、だんごを作るみたいに横綱が簡単にできるわけじゃないからね。

昇進の基準を甘くして、私みたいな横綱ができたなら、またそれはかわいそうだし、やっぱりいいものを作ろうと思えば、吟味しないとイケないわけですから。

なかなか次の横綱候補が現れないという現状がありますけど、あわてないでしっかりした成績を上げて、自信を持った横綱が誕生したほうが、結果的には長持ちしていいんじゃないかと思いますよ。

以前、私がいた春日野部屋にも、栃煌山という若手がいます。上がった当初は、「横綱になる」と色紙に書いていたそうだけど、夢は大きく持ったほうがいいし、やっぱりそういう子が出てこないよね。「俺は三役くらいでいいや」と言うんじゃなく、目標を持ってやるのが大切なんです。

われわれが入門した昭和三〇年頃は、戦争で兵隊に行っていたけれど、帰ってきてまた相撲に戻ったとか、そういう力士がゴロゴロいました。まあ、その頃は戦後十年ほどが経っていたから、まだどうにかゴハンが食べられるようにはなっていたけれども、そんなにようけ食べられるわけじゃなかった。

でも、今はお金があれば、どこにでも行って、いつでもおいしいものが食べられる。今の日本人の力士たちは、生まれた時からそういう環境で育っているんだから、私らの頃みたいなことをしると言って

もやっぱりダメなんですよ。厳しく接すれば、すぐに家へ帰ってしまうし。でも、厳しくやらなければ、相撲は強くならない。部屋の師匠としては、力士の数もある程度必要。だから、怒りたくても怒れない。

でも、あまり力士が大事にされ過ぎちゃうと、力士のほうが師匠より優位に立ってしまうということも起こる。「俺がいるんだから、師匠でいられるんじゃないか」と思われてしまうのも、また困りものです。

だから、一つの部屋にそれなりの人数がいて、大勢の中で競り合って、稽古していくというのが一番力がつくんですが、競争心を起こさせようと思っても、部屋の数が多くて、一部屋の力士の数が少ないから、部屋の中での競争なんてものはまずない。難しい時代です。

それでも私が望みたいのは、体がちっちゃい力士は大変だろうけれど、自分で頑丈な体を作って、稽古をたくさんすることで、上に上がって行ってほしい。

強い力士、大きな力士、小さな力士……いろいろなタイプの力士がいてこそ、土俵は盛り上がるものですからね。